

動物飼育Q & A

【研究大会で出された質問について】

第3回大会のシンポジウム参加者から質問を受け取り、いくつかは会場で論議したが、いくつかは回答を試みたい。

(Q) 飼育舎の広さによる適正な飼育数は？

(A) 飼育数は、広さによってきめるのではなく、毎日の世話の大変さを考えて決めてください。ウサギが23羽もいたら毎日バケツ3杯の糞をかたづけなければならないので、それを子ども5人で掃除をすると負担が大変です。「掃除に忙殺される飼育は負担が多すぎる」「掃除はすぐに終わって、たっぷり遊べる飼育を！」そのことにより、動物に親しみがわくし、動物もきれいに生活させることができ、人への衛生面からも安心でしょう。

具体的には、世話をする都合から、3匹くらいまでと考えます。生活科で飼う場合、担当学年が3クラスだったら、3匹ではいかがでしょうか？ふれあいをするときには、生徒数に比して動物が少ないでしょうから、近隣校から借りれば、学校間の親しみも沸きます。私どもも、御礼の手紙や、校長先生からのお礼の電話をお願いしたりします。

(Q) 動物からみたら、学校は過酷ではないか。かわいそうだろう。飼うべきではない。

(A) こどもの教育のために学校で飼われている動物を学校飼育動物といいます。各地の動物病院(小動物開業)の獣医師が属する日本小動物獣医師会、日本学術会議での学校飼育動物の勉強会、また社)日本獣医師会の専門委員会など、この問題に真剣に取り組んでいる獣医師の見解は、「この問題にはいろいろ論議があることを承知しているが、学校の動物はこどもたちの育ちのために必要な動物である、という立場から論議を始める」としています。

子どもたちは私たちの未来であり、彼らが優しく育たなければ 私達は安心して老人になれません。それに、動物と子どものどっちが大事かといえば、人類としてこどもを「人」に育てる方がはるかに重要な命題でしょう。また「動物が可哀想」といったら、私たちは動物性たんぱく質もとることができないでしょう。

しかし、まだまだ動物の状況が悪く悲惨なことも事実で、これにより子どもへの逆効果が心配さ

れますので、これまでもずっと、学校を支援しようと全国で獣医師会が動いており、今も努力しています。

今まで何度も講演会を開き、長い間獣医師会が行政に働きかけてきた大阪府でも、最近県教育委員会から正式に獣医師会に相談があるなど、この考えはじょじょに広がっています。ぜひ、皆様も、学校から動物を取り去るのではなく、良い飼育を支援するようにお願いします。

しかし、命をになう子どもの主体性をくずさないような支援が必要です。たとえば夏休み、親やボランティアが子どもそっちのけで動物の世話をせず、当番の子どもの指揮のもとに「大人は手伝い」に止める注意が必要でしょう。

(Q) 都市部を中心に家庭環境に恵まれない子が増え、自分が愛情を受けているという実感に乏しい子達が少なからずいると思うが、そういった子達もきちんと小動物に対し愛情を注ぐことができるのだろうか？飼育動物が子どものストレスのはけ口になってしまう危険性はないのだろうか？(しかし、心に何らかの問題を抱えた子にとっても癒しになるような活動を行えば・・・)

(A) 身近な動物にどのように接するかは事例によってさまざまでしょう。ある子はストレスのはけ口にするには十分に考えられるが、多くは人にはきつく当たっても動物にのめりこむように心の平安を求めることが見られている。

米国に課題を抱えた青少年を、家畜や動物たちと共生させ、その世話を通じて教育を行っているグリーンチムニーという更生施設があるが、時には動物につらく当たっても、やはり動物がいることがその子にとって、居場所をつくり、安定をもたらすと言われている。また動物の命を絶つ事例があっても、その行為自体が子どもにまた新たな刺激となり、更正への道につながる。

日本の幼稚園の事例で、受験をする5歳児が、いつも幼稚園の大きな鶏を抱えてほおずりしているとの報告がある。この子は鶏を独占し他の子に渡さないそうだが、ストレスを抱えた心のバランスを必死に保とうとしているのだと、担任は考えて、そのことで保護者と相談しようとしている。このように、さまざまな意味で、子どもにとって「抱くことができる動物」は貴重だといえる。

(Q) ふれあい教室や飼育担当教員研修に派遣される獣医師は特定の人か、あるいは研究会員の獣

医師全体が交代で担当しているのか？

(A) 各地で学校にかかわったり、教職員研修を担当している獣医師は、各地の獣医師会に属しています。その殆どの方は全国学校飼育動物獣医師連絡協議会に参加なさっておられます。そこで、何を先生方に伝えるべきか、どう伝えるべきかを、情報を交換しながら勉強しています。

全国学校飼育動物研究会は この方達と教育関係者など学校の先生方など、教育的な主眼をもった集まりです。

(Q) アレルギーの児童へのふれあい指導をどのようにするべきか？

(A) まず保護者にアレルギー事情を聞き、親と相談の上、マスクや手袋をさせてふれあわせませ。またタオルで動物をくるんで膝にだかせ、動物の顔だけを皮の厚い手のひらだけで触らせる事もあります。

多くの場合、不安だけで終わり、いつしか子どもは素手で動物を触ってもくしゃみやかゆみ、鼻も出ないまま終わるようですが、不安への対応は必要でしょう。子どもが不安がるなら無理強いはいないようにします。

実際にかゆみやくしゃみが出る場合は、マスクをはずさずに、直接的な動物との接触は避けさせます。しかし飼育体験を楽しむにすることが多いので、反応がおきない程度の世話、たとえば餌を持ってくる。水瓶を洗う。あるいは、遠くから餌を手袋をして与える。など工夫すると良いでしょう。

しかし、おなじ室内に入っただけで、遠くにいるその子がくしゃみやかゆみ等の反応を見せるときは、教室に動物を入れるのは諦めましょう。

現在のところ、ウサギや小型ハムスター（ジャンガリアンなど）に反応する人が多いです。特にジャンガリアンなど小型ハムスターに過敏に反応する人があり、ハチのアレルギーのように命にかかわる事例がごく希に報告されています。

ゴールデンなど中型・大型ハムスターには、そのような事例は報告されていません。

なお、動物は換気を良くして、ケージもきれいに保ち（日に2度の世話）、かつ沢山飼わない方がアレルギーを引き起こす率が少ないと言われています。

【水害を受けたウコッケイについて】

(Q) 保育園の者です。実は先日の台風の影響で東京が豪雨に見舞われた際当保育園も床上80センチの浸水被害をうけました。そちらは現在復旧工事中ですが、ご相談は飼っているウコッケイです。

夜中の浸水でとり達の救済には手がまわらず、気の毒なことをしてしまい1羽死亡してしまいました。残りの3羽は元気なのですが、小屋ももちろん浸水してしまいました。とりインフルエンザの流行もある時期に汚水に小屋が浸水してしまったので、心配しています。のこりの3羽は元気にしておりますが、今後気をつけたほうがいいことを教えてください。

(A) 亡くなったのは気の毒でしたね。外に出せば良かったかと思いますが、どこかに行ってしまったか、あるいは余計ぬれてだめになったかは小屋を見ないと何とも言えませんね。

さて雨が降ったのはもう2週間も前ですから、障害がでるとしたらもうでているでしょう。今、くしゃみやなく、元気で良かったべ、糞をよくしているのなら心配はないと思いますが、何かあったら病院です。また、暑さ寒さに気をつけてください。人でもその鳥と一緒にいても辛い環境なら大丈夫だと思います。

なお鳥インフルエンザは今、はやっていないといえます。今回の感染事例の原因として ワクチンが疑われていますが、養鶏家が大事な鳥のために よかれと思って（国内に内緒で違法な）ワクチンを打ったらしいのですが ワクチンで鳥に抗体ができたので、個体検査で感染したと明らかになりました。つまりワクチンで弱い感染をさせている訳です。

しかし、抗体が検出されたのは、今まではすべて国策上処分されてきました。またワクチンを打たれた鳥から、ウイルスが周囲に漏れたようです。これは 国内には鳥インフルエンザはあってはならない、という 畜産行政の考えから行われます。人への健康障害を心配して行うものではありません。つまり、お宅のチャボにとって、今回のインフルエンザに関しては、近くに養鶏場があり、そこと接触がない限り心配ありません。出しても大丈夫でしょう。しかも今回のウイルスは、鳥すら死なない弱毒性の鳥のインフルエンザです。

日に2度の餌や水やり、汚れ掃除など 普段の世話をしっかり行って健康にすごさせ、可愛がって下さい。そうすれば、こどもたちに優しい面を見せてくれるでしょう。